

## ハイデガーのシェリング解釈について

### ——根底と実存及び思惟以前の存在との連関における介在的な知——

#### はじめに

振り返れば、ハイデガーがヤスパースを介して<sup>2</sup>『人間的自由の本質とそれに連関する諸対象に関する哲学的考察』（1809. SW I-7, 336-416. 以下では『自由論』と略記する）<sup>3</sup>を中心としたシェリング哲学と本格的な出会いを果たしたのは、『存在と時間』（1927）の公刊以前の1926年の春であった<sup>4</sup>。その後、1927/28年冬学期には『自由論』に関する演習<sup>5</sup>を行い<sup>6</sup>、1936年の夏学期講義<sup>7</sup>においてこれに関する本格的な解釈を遂行する。1941年の講義<sup>8</sup>でもこれを取りあげている。このような経緯は多かれ少なかれハイデガーとシェリングの近さと証している。むろんこれについては従来様々に論じられてきたところである。本発

---

<sup>1</sup> 日本学術振興会特別研究員

<sup>2</sup> Vgl. Briefwechsel, 62.

<sup>3</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände* [1809], in: *Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling Sämtliche Werke*. Ab. I. Bd. 7. Hg. von K. F. A. Schelling. Stuttgart: Cotta'sche Verlag 1860, S. 331-416.

<sup>4</sup> 茅野良男は、ハイデガーが神学部時代に神学者 C.ブライク（Carl Braig, 1853-1923）からヘーゲルとシェリングの思弁神学に対する意義を教えられたとするが（茅野良男『ハイデッガー』講談社、1984年、10-11頁を参照）、この際の実理解は表面的なものに留まったと思われる。

<sup>5</sup> Vgl. „Schelling: Das Wesen der menschlichen Freiheit. Protokollheft aus dem WS 1927/28“, in: *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Hg. von Lore Hühn u. Jörg Jantzen. Stuttgart: fromman-holzboog 2010 (=Schellingiana Bd. 22. Hg. von Walter E. Ehrhardt u. Jochem Hennigfeld im Auftrag der Internationalen Schelling-Gesellschaft), S. 331-372.

<sup>6</sup> Vgl. Briefwechsel, 80.

<sup>7</sup> Heidegger, Martin: *Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit (1809)*. [Freiburger Vorlesung im SS 1936]. Hg. von Ingrid Schüßler. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1988 (=Gesamtausgabe Bd. 42. II. Abteilung. Vorlesungen 1919-1944).

<sup>8</sup> Heidegger, Martin: *Die Metaphysik des deutschen Idealismus. Zur erneuten Auslegung von Schelling: Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände (1809)*. [Freiburger Vorlesung I. Trimester 1941 u. Freiburger Seminar im SS 1941]. Hg. von Günter Seubold. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1991 (=Gesamtausgabe Bd. 49. II. Abteilung. Vorlesungen 1919-1944).

表では、1927/28年の演習に参加したガダマーが<sup>9</sup>、その際ハイデガーは人間の実存をはじめとする事実性一般における「根拠の解き明かし難い暗さ」(GGW 3, 306)を後期シェリングの「思惟以前のなもの」(GGW 2, 103)のなかに再度認識した、というこれまでほとんど顧みられてこなかった指摘を糸口にしたい<sup>10</sup>。これは、ハイデガーが『自由論』に留まらず、後期シェリングにも目を向け、そこにおける消極哲学と積極哲学の区別において後者が取り扱う、人間的理性の外にある最根源的意味での事実性に対して大きな関心を向けていたことを示唆するものである。

そこですぐに予想されるのは、ハイデガーのシェリング読解において人間の知と存在の関りが大きな関心事となっていたはずだということである。言うまでもなく『自由論』の主題は人間の自由であるし、後期シェリングでラディカルに問題となるのは、理性的思惟の必然性によってアプリアリに導出することが不可能であるような偶然的な事実性であり、また消極哲学の理性的思惟の限界だったからである。こうした見立てを念頭に置いてハイデガーの『自由論』解釈を見ると、そこでのハイデガーの中心的な関心が、従来根底と実存の区別や無底といった問題事象の陰に隠れた——むしろそれらの重要性はまったく否定しない——、後期思想における現-存在(Da-sein)の問題を背景にした、人間の知の役割に向けられていることがわかる。そこで問われるのは、如何なる意味における人間の知的役割がそこで求められていたのか、ということである。これがここでの問いである。そしてそれは非主体的ないし非主観的な人間理解、つまり介在的であるという意味で非主体的な人間の知的役割が問題であったというのがここで主張である。

よって本発表の目的は、後期ハイデガーにおける人間の知の介在的な働きの意味に関して、根底と実存、思惟以前の存在といった問題事象との連関において解明することにある。初期思想の現存在自身のために(Umwillen)が構成的な超越と地平によって特徴づけられるある種の人間中心主義とは別の仕方における人間の役割を、ハイデガーによるシェリングの『自由論』の解釈及び両者における思惟以前の存在の意味に関する比較考察を通して示すことである。それゆえ、思惟以前の存在に関して、従来の研究では従来(最)初期ハイデ

---

<sup>9</sup> 晩年のガダマーは、確かに1927/28年ではなく、1925年に『自由論』に関するハイデガーの演習に出席したと述べる(Vgl. GGW 3, 306)。だがマールブルク大学の講義及び演習のタイトルの記録を検証した結果、ガダマーが1925年と記憶している演習は、実際には1927/28年冬学期のものとする訂正意見が研究者によって提出されている

(Vgl. EdB, 290-293)。J.グロンダンもガダマーの記憶に疑念を呈している(Vgl. Grondin, Jean: „Die späte Entdeckung Schellings in der Hermeneutik“ [1997], in: *Zeit und Freiheit. Schelling – Schopenhauer – Kierkegaard – Heidegger*. Hg. von I. M. Fehér und W. G. Jacobs. Budapest 1999, S. 65-72)。本発表もこの訂正意見に従う。

<sup>10</sup> Vgl. GGW 3, 306。イムダールも半ばガダマーの記憶に依拠するかたちで最初期ハイデガーの生の事実性とシェリングの「思惟以前のもの」を結びつける(Imdahl, Georg: *Das Leben verstehen. Heideggers formal anzeigende Hermeneutik in den frühen Freiburger Vorlesungen (1919 bis 1923)*. Epistemata Philosophie Bd. 206. Würzburg: Königshausen & Neumann 1997, S. 60)。

ガーと思惟以前の存在の（影響）関係が取り上げられてきたが<sup>11</sup>、本発表ではむしろ後期ハイデガーとの関係を問題にしたい。その理由は、従来考えられてきた思惟以前の存在の（最）初期ハイデガーへの影響が近年疑問視されている点<sup>12</sup>、そして後期ハイデガーのテキストにもその語が登場する思惟以前の存在の問題が彼の思想（形成）において重要な意味を持つと考えられるにも関わらず従来これが等閑視されてきた点にも求めることができる。

解明は、具体的には以下の手順を取る。まず、1936年夏学期講義における『自由論』解釈を参照しつつ、『自由論』における根底と実存の区別における神の生成、創造作用と、そこにおける人間の知の介在性に関して、「知的愛 *amor Dei intellectualis*」（スピノザ）に象徴される新プラトン主義的背景やこれについての研究を参照しつつ明らかにする（1節）。つぎに、準備的考察として、後期シェリングのテキスト「積極哲学の諸原理の別の演繹」を取りあげて、理性的思惟と思惟以前の存在の関係に関して明らかにしておく（2節）。そしてこれを受けて、後に自己批判の対象となるハイデガーの形而上学構想における現存在の超越の基本的理解を1928年夏学期講義に確認し、そこにハイデガーと思惟以前の存在の事象的な結びつきを見る先行研究（M.ガブリエル）の解釈に批判的検討を加える（3節）。最後に、後期の対話篇「アンキバシエー〔接近〕」（1944/45）を参照しながら、形而上学的な表象的思惟への（自己）批判の所在を明確化しつつ、ハイデガーの後期思想の存在そのものと思惟以前の存在の結びつき、そして存在の（非）覆蔵性の自己覆蔵性、存在史における存在の自己贈与、存在のゲシックの自己変貌における人間の知、人間の言葉の介在的な役割について明らかにしていきたい（4節）。

## 1 節 根底と実存の区別における介在的な知

本節では、1936年夏学期講義のハイデガーの『自由論』解釈の関心としての人間存在の知を明確化する。具体的には、その『自由論』解釈を参照しつつ、根底と実存の区別における生成する生命としての神の創造過程とそこにおける人間の介在的な知について明らかにする。

ハイデガーは、『自由論』の本格的な解釈に入るに先立ち、あらかじめつぎの箇所を最重要箇所として提示している<sup>13</sup>。

人間の内には、闇の原理の全き力があると同時に光の原理の全き威力がある。人間の内には最深の深淵と最高の天空、あるいは両者の〔二つの〕中心 *Centra* がある。人間の意志は、まだ根底にある神の永遠の憧憬に隠された萌芽であり、神が意志を自然へ決し

---

<sup>11</sup> Vgl. Schulz, Walter: „Über den philosophiegeschichtlichen Ort Martin Heideggers“, in: *Heidegger. Perspektiven zur Deutung seines Werkes*. Hg. von Otto Pöggeler. Köln.Berlin: Kiepenheuer & Witsch 1969, S. 95-139.

<sup>12</sup> Vgl. EdB, 290-293.

<sup>13</sup> Vgl. GA 42, 93.

たときに見て取った、深さの内に閉ざされた神的な生命の閃光である。(SW I-7, 363)

この講義では、『自由論』を序論 (SW I-7, 336-357)<sup>14</sup>と本論の 7 つの章 (SW I-7, 357-416) に分ける<sup>15</sup>。ハイデガーはこの内の序論と本論の最初の 4 つの章 (SW I-7, 357-394) に「シェリングの論文の本来の重要性」(GA 42, 281) を洞察する。うへの箇所は、『自由論』の序論 (SW I-7, 336-357) が終わり、本論 (SW I-7, 357-416) に入って暫くしたところにある。ここはシェリング自身が『自由論』の「考察全体の最高点」(SW I-7, 406) と考える後半部分にはまだ届いていないところである。それにもかかわらず、ハイデガーは、この箇所を理解することが、とりもなおさず「この論文 [= 『自由論』] 全体を把握することである」(GA 42, 93) とその重要性を強調する。この背景にあるのは、同じ箇所で示唆されるように、後期思想圏に属す「現 - 存在 *Da-sein*」(GA 42, 92) における人間への関心である。この関心こそが『自由論』解釈の根幹にあったものである。ハイデガーのその講義をつぎの言葉で締めくくっている。「人間とは、神が自らを啓示する *sich offenbart* とき、神がその力を借りてのみそもそも自らを啓示する *sich [...] offenbaren* ことができる者であらねばならない他者である」(GA 42, 284)。これは、シェリングにおいてそう考えられているというよりも、むしろそう考えるべきだというハイデガーの見解である。

さて、『自由論』の序論では、人間の自由は「体系を統べる中心点」(SW I-7, 336) であると宣せられる。そして後半部分で神について、「神の悟性のなかに体系がある。しかし神自身は体系ではなく、生命である」(SW I-7, 399) と言われる。結論から言えば、悟性に置かれた体系の中心点としての人間と、それ自身は体系ではない生命として神の關係に、ハイデガーは『自由論』の困難を見る。以下では、人間の知の介在的な役割を明らかにしながら、この困難の意味へ歩みを進める。

スピノザが神の「外部に *extra*」(SW I-7, 344)<sup>16</sup>にも神の内部にも神の「ほかに *praeter*」(SW I-7, 344) なにも認めないのに対して、シェリングは、神とは切り離せないが神のほかに (*praeter*) 神の内なる自然 (*Natur in Gott*) を置く。この神の内なる他者である自然の根底は、「永遠なる一者が自己自身を生まんとして感ずる憧憬」(SW I-7, 359) である。これは「神の現存在の最初の活動」(SW I-7, 360) として、まず神自身の内に、それによって「神が自己自身を見る」(SW I-7, 360 f.) ところの「内的な再帰的表象」(SW I-7, 360) を生み出す。この再帰的表象において神は最初に「現実化される」(SW I-7, 361)。この表象とは、憧憬の「悟性」、「ことば *Wort*」(SW I-7, 360) のことである。

ことばを自らの内で感じ、そして同時に無限の憧憬を感じる永遠の精神は、精神それ自身である愛によって動かされてことばを語り出し、そうして、悟性は憧憬とともに自由

---

<sup>14</sup> Vgl. GA 42, 23.

<sup>15</sup> Vgl. GA 42, 182.

<sup>16</sup> Vgl. SW I-7, 357.

に創造する全能の意志となり、原初には無規則である自然を自らのエレメントないし道具としてその内に形象化する。(SW I-7, 361)

精神は、神が憧憬のことばの内に自らを見て取るという再帰性の内で成立する。これは、神が「原初の自然へことばを語り入れることでおのれから歩み出る」(GA 42, 224) ことである。神は再帰的な自己展開において、実存者となるべく歩み出るのである。「永遠の精神」とは、その内で神の自己自身への統一 *Einheit des Gottes zu sich selbst*、絶対者の統一性が自らを展開する *sich [...] entfaltet* こととなる規定である」(GA 42, 224)。この精神の再帰性は、神が「自身において、根底の無規則な自然の内へ〈自らを語り入れること *Sichhineinsprechen*〉として〈自らを語り出すこと *Sichaussprechen*〉」(GA 42, 224 f.) である。悟性の意志はその「最初の働き」(SW I-7, 361) として、根底の意志に抗して「諸力の分開」(SW I-7, 361) を行う。この分開の「段階的に生起する」(SW I-7, 362) 展開において自然の様々な存在者が成立してくる。こうした段階の内に人間も成立する。

自然が見いだされる瞬間には創造者が自然から歩み出て、自然を乗り越え *übersteigen*、それによって自然の上に立た *über ihr stehen* なければならない。自然の創造が静止し変貌する自然の最高の段階においてこそ、人間が発生する。(GA 42, 233)

人間は、被造物として根底の意志と悟性の意志をともに持つ。根底の意志は、被造物においては普遍的でない特殊な「我意 *Eigenwille*」である。人間の我意それ自身もひとつの「特殊意志」(SW I-7, 363) であるが、すべての特殊意志の中心として、悟性の意志と統一的となる。この根底に由来する原理において人間は神から区別される。『自由論』はつぎのように述べる。

自然の根底から押し上げられてきた原理、人間がそれによって神から分かれた原理は、人間の内の自己性であるが、それは観念的原理との統一によって精神となる。自己性そのものが精神である、あるいは人間が自己的な特殊な(神から分かれた)存在者として精神である。この結びつきがまさに人格性を形成する。自己性が精神であることによって、自己性は同時に被造物から超自然的なものへ高められている。自己性は、全き自由において自己自身を視る *sich selbst [...] erblickt* 意志であり、もはや自然の内に創造された普遍意志の道具ではなく、自然を超え自然の外にある。精神は自然において光と闇の原理の統一を超えて高められたものとして、光を超えている。自己性は精神であることによって、両原理から自由である。(SW I-7, 364)

ハイデガーによれば、人間は、自己的で特殊な存在者である点で神から区別されていることで、「根底の最も隠された意志を意志する」(GA 42, 245)。そして同時に、精神として「分

離された特殊化の統一の内自己自身を視る *sich selbst erblickt*」(GA 42, 245)。この「〈自己自身を視る〉という精神の働きにおいて、人間は従来の意味での一切の自然と被造物を超越する *ist [...] hinaus*」(GA 42, 245) ののである。こうしてハイデガーは、本節冒頭で引用した箇所についてつぎのように述べる。

まさに人間の内なる根底のこの意志は、人間の内でこそ悟性の光へ高められ、人間の内でこそ、ことばは全き仕方<sup>17</sup>で語り出される。人間は自ら語り、言葉の内<sup>18</sup>で本質化する。そうすることで人間は悟性の光を超えて *über* 高まる。人間は動物のようになにか照らし出されたものの内を動くのではなく、むしろこの光を語り出し、この光を超えて高まる。そうして光を超えていることで、人間は、[...] 光と闇を自らの相互関係そのもの内で支配する統一化 [...], 精神である。人間の内には——私たちの知る限り人間の内においてのみ——二つの原理、根底の最深のものつまり自己性への我意 *Eigenwille* と、ことばの最高のものつまり全体の統一の照らし出された存在への意志、つまり固有の統一がある。人間の内には「最深の深淵と最高の天空」がある。(GA 42, 245 f.)

人間のうちに、深淵と天空、根底と実存の全体の統一があるように見える。「ただ彼において(人間において)のみ、神は世界を愛した *In ihm (im Menschen) allein hat Gott die Welt geliebt*」(SW I-7, 363)。これは神が自らの世界を愛するある種の再帰的な自己愛である。ここで神の自己啓示や自己表象の働きが再帰表現 (*sich offenbaren/sich erblicken*) であることは、そこでの人間の知の位置づけを考えるうえで重要な示唆である。そこで『自由論』の序論で、人間の知についてシェリングが、セクストゥス・エンピリクスがエンペドクレスについて述べた「自らの内なる神によって自らの外なる神を把握する」(SW I-7, 337) という原理を引き合いに出していたことが想起される。この記述に関して、ハイデガーは、「もし眼がそれ自身太陽的でなければ、眼は太陽を見ることがなかっただろう (*οὐ γὰρ πόποτε εἶδεν ὀφθαλμὸς ἥλιον, ἡλιοειδὴς μὴ γεγενημένος*)」(Enneaden 1. 6. 9) という『エネアデス』の言葉を引用して、「プラトンの - プロティノスの原理」(GA 42, 96) を提示する<sup>17</sup>。だが

---

17 一般にハイデガーと新プラトン主義との関連はほとんど無視されるが、最初期ハイデガーは、アウグスティヌスにおける自由理解に関して、「一切の被造的存在は〈一者〉からおのれの存在を獲得する。このかぎりでは、この〈一者〉から離れはするが、同時に〈帰還 *recursus*〉の傾向を持つ [...]。魂の存在には、それが由来したところへの帰還 *Rückkehr* が属す」という「新プラトン主義の教義に由来する二重の運動」(GA 17, 158 f.) によって規定されている。ハイデガーは、デカルトの自己意識の確実性 (*certum*) とアウグスティヌスにおける自己の確信性 (*Gewißheit*) を区別して後者により高い評価を与える。それによれば、「アウグスティヌスの意味における自己確実性 *Selbstgewißheit* とその〈自己 - 自身を - 持っていること *Sich-selbst-haben*〉は、「コギト」のデカルト的な明証性とはなにかまったく異なる」(GA 60, 298) ものとして評価される。善としての〈自己自身のため〉を慮る中動態 (*vox media*) を根本動態とする(自己)関心 (*Sorge/cura*) の概念へと引き継がれる(拙論「初期ハイデガーにおける関心の中動態」『立命館哲学』第28集、

これは、ある者が他者をただ単に相似性、類似性において認識するという事ではない。ここにおける人間と神の関係をより詳細に理解するために、ホクレーベなどがシェリングのなかに洞察するスピノザ<sup>18</sup>の『エチカ』における「神の知的愛 *amor Dei intellectualis*」<sup>19</sup>が引き合いに出されるべきである<sup>20</sup>。これは、「神は無限の知的愛をもって自己自身を愛する *Deus se ipsum amore intellectuali infinito amat*」(*Ethica* V. Prop. 35) という再帰的な自己愛である。もう少し分節化すると、これは神の「人間に対する *erga homines*」(*Ethica* V. Prop. 36) 愛と、人間の「神に対する *erga Deum*」(*Ethica* V. Prop. 36) 愛からなる人間の知性を介した再帰的な自己愛である<sup>21</sup>。つまりただ単に神が神自身を愛するという自己愛ではなく、神が人間を介して——〈人間が神を愛する〉という働きを介して——自己自身を愛するという自己愛なのである。スピノザ研究者のゲーブハルトは、この再帰性が、「流出によって世界が神性から出来し、そしてまたその世界が魂において神へ帰還する *kehrt [...] zurück*」<sup>22</sup>という新プラトン主義の基本的発想に淵源することを指摘する。言い換えれば、創造者から発した創造行為が人間の「知的部分の働きを介して *mediante* 創造者に帰還する」(エブレオ<sup>23</sup>)<sup>24</sup>ところこそ創造行為の完成を見るという〈人間の知的認識を介した〉創造的円環性である。世界が「自己自身を認識する *erkennt sich selbst*」働きの「自己認識の構造 *autoepistemische Struktur*」の「再帰性 *Reflexivität*」<sup>25</sup> (ホクレーベ) である。実のところハイデガーの言う「プラトンの - プロティノスの原理」というものも、この人間の

---

立命館大学哲学会編 2017 年 3 月、87-108 頁を参照)。

<sup>18</sup> ドイツ観念論の重要な精神史的水脈のひとつであるスピノザ主義に今後さらに光を投げかける資料として、田中光が雑誌『モルフォロギア』(「ゲーテ自然科学の集い」編)に10年以上に亘り掲載してきたヤコービの『スピノザ書簡』の翻訳を挙げておく。

<sup>19</sup> Vgl. *Ethica*, V. Prop. 32-36.

<sup>20</sup> Vgl. Gabriel, Markus: *Das Absolute und die Welt in Schellings Freiheitsschrift* (Bonner Philosophische Vorträge und Studien 25. Hg. von Wolfram Högerebe). Bonn: University Press 2006, S. 33 und S. 62 Anm. 59 und Düsing, Edith: „Fichtes späte Religionsphilosophie“, in: *Der Streit um die Göttlichen Dinge (1799-1812) mit Texten von Goethe, Hegel, Jacobi, Novalis, Schelling, Schlegel u.a. und Kommentar*. Hg. von Walter Jaeschke. Hamburg: Felix Meiner 1994, S. 125.

<sup>21</sup> スピノザは、「神は自己自身を愛する限りにおいて人間を愛する」(*Ethica* V. Prop. 36) のであって、自らへの愛なしに人間を愛することはない。あるいは厳密には、「神が人間を愛するなど」(『短論文』、196 頁) は言えず、一切は神の内部にある神自身であるからして「神には他の物に対する愛というものはあり得ない」(『短論文』、197 頁) と述べる (Vgl. Gebhardt 1921, 224)。

<sup>22</sup> Gebhardt 1921, 219.

<sup>23</sup> ゲーブハルトによれば、「レネオ・エブレオは彼によってスピノザがプラトン主義との結びつきに足を踏み入れた者として証明されている」(Gebhardt 1921, 188)。エブレオはユダヤ人(教徒)であったが、同時に強いプラトン主義者でもあった (Vgl. Gebhardt 1921, 182-185)。

<sup>24</sup> Ebreo, Leone (本田誠二訳)『愛の対話』平凡社、1993 年、439 頁。

<sup>25</sup> Högerebe, Wolfram: *Prädikation und Genesis. Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings »Die Weltalter«*. STW 772, Frankfurt am Main: Suhrkamp 1989, S. 52.

知を介した神ないし世界の再帰的な自己視であったと考えられる。実際ハイデガーは、『自由論』の解釈にあたって、人間は「全体としての存在者が自らを知る結構 *das sich wissende Gefüge*」(GA 42, 157) という再帰的な自己知において不可欠な「本質的継ぎ目 *Fuge*」(GA 42, 157) として機能する「知る者 *der Wissende*」(GA 42, 157) であるべきはずだと述べる。単に〈私が知る〉という主観的知とは異なる、神の生成、全体としての存在者の自己知において介在的に働くこの人間の知こそ、ハイデガーが『自由論』における根底と実存の中心としての人間の悟性、人間的自由の知の働きに看取しようとした積極的側面であった。

しかしうえで述べたように、結局ハイデガーは『自由論』の構想に解消し難い困難を見る。それは根底の意志と悟性の意志の対立である。光が暗い根底を照れせば照らすほど、根底はさらに暗闇に自らを鎖すという事態、これによって両者の「統一がますます統合不可能になるばかりではなく、互いに引き離されさえする」(GA 42, 279) という困難である。すでに述べたように、「神の悟性のなかに体系がある。しかし神自身は体系ではなく、生命である」(SW I-7, 399)。それゆえ、悟性に対立する根底は「体系の他者」(GA 42, 278) として排除されるのである。従ってこの体系の統一は、ハイデガーが求める全体としての存在者の統一ではないということになる。シェリングは体系の統一ということでそうした全体の統一を考えていない。それゆえ、ハイデガーにとってはこの全体としての存在者の自己知の働きに介在すべき人間は、『自由論』では悟性の統一たる体系の統一を介在する者でこそあれ、全体としての存在者の自己知の結構、あるいは生命としての神を介在する者ではないことが明らかになるのである。

## 2 節 後期シェリングにおける思惟以前の存在

これに対して『自由論』は根底と実存の真の全体的統一を無底によって考えようとしている。しかしハイデガーがこの根底と実存の最高の統一である絶対的無差別としての無底、愛としての無底をほとんど無視することは、先行研究によって再三指摘されている<sup>26</sup>。敢えて言えば、『自由論』での無底に関する論述は、人間の知との関係を扱うというよりも、単に理論的な支柱として挿入されている印象が強い。「シェリングは本質的な歩みの必然性を見ていない」(GA 42, 280) という無底についての論述をめぐる批判も、そこにおける人間の役割に関する洞察の欠如に向けられていると言える<sup>27</sup>。ハイデガーの無底に対する冷淡さの主たる要因はこうしたところにあると考えられる。本発表では殊更に無底を論じることはせず、ハイデガーとシェリングの関係を探るために、むしろ後期シェリングの思惟以前の存在をその視座として取り上げたい。これは、あらゆる可能性、根拠に先行するそれ自身は没

<sup>26</sup> この論点からの代表的研究としては、大橋良介「シェリングの無底と体系——ハイデガーの解釈との対決」『モデルネの翳り——シェリング『自由論』の現在——』晃洋書房、1999年、127-145頁がある。

<sup>27</sup> Vgl. GA 42, 280.

根拠的なものとして、無底と同じ問題系をなしている<sup>28</sup>。

さしあたり本節では、次節以降でのハイデガーとの比較考察の準備として、シェリングにおける思惟以前のものの意味について明示しておく。

後期シェリングは、消極哲学と積極哲学を対置して、両者がひとつの全体をなす「唯一の哲学」(SW II-3, 94)を構想した<sup>29</sup>。消極哲学は理性の内にもみ留まり、現実存在するものを度外視するヘーゲルに代表される従来の理性主義的、論理主義的哲学を意味する。シェリングによれば、この理性は自らの内に留まることなく、自らの外に出て現実的内容を確保しなければならない。そこで、理性、思惟の必然性ではなく、「世界を説明する際に、何かある積極的なものを、つまり意志や自由、行為の遂行を想定」<sup>30</sup>し、具体的で偶然的なものを扱う積極哲学が要請される。

ここでは範例的なテキスト「積極哲学の諸原理の別の演繹」<sup>31</sup>を取りあげる。このテキストにおける世界の成立の重要契機として、(1)単に現実態として、つまり偶然的に必然的に現実存在する思惟以前の存在、(2)これに対立する別の存在 (*ein anderes Seyn*) の可能性 (ポテンツ)、そして (3) 神、本性上ないし本質上、つまり必然的に必然的に現実存在するもの三者が挙げることができる。まず思惟以前の存在と別の存在の可能性についてつぎのように述べられる。

ポテンツは思惟以前の存在に先行しなかった。そのため、ポテンツはこの〈思惟以前の現実存在者〉の現実態において克服され *überwunden* することもできなかった。そのことによって、まさにこの思惟以前の現実存在者のなかに、〈排除されえない偶然的性 *nicht auszuschließende Zufälligkeit*〉が置かれるのである。(SW II-4, 338)

ポテンツ (可能性) と現実性は対立的だが、相互に置換可能でもある。だがもし原初において可能性を現実性の出発点に置くとすれば、その出発点そのものが再び現実的でなければならない。この遡行は無限につづく<sup>32</sup>。よって出発点は現実性に置かれなければならない。現

---

<sup>28</sup> 「シェリング自身は『自由論』のなかでこれ [=思惟以前の存在] に「無底 *Ungrund*」の表現をあてている。なるほどシェリングは、この無底を彼の後期哲学において思惟以前の存在によって置き換える。だが体系の機能的位置づけは同じものである」(Gabriel 2010, 96 f.)。

<sup>29</sup> 藤田正勝「積極哲学と消極哲学」(西川富雄監修)『シェリング読本』法政大学出版社、1994年、320-332頁を参照。

<sup>30</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *Einleitung in die Philosophie*. Hg. von Walter E. Ehrhardt. Stuttgart-Bad Cannstatt (Frommann-Holzboog) 1989, S. 13.

<sup>31</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: „Andere Deduktion der Principien der positiven Philosophie“, in: *Philosophie der Offenbarung*. Ab. II. Bd. 4. Hg. von K. F. A. Schelling. Stuttgart: Cotta'sche Verlag 1858, S. 335-356. 1941年までには成立 (諸岡道比古訳「積極的哲学の諸原理の別の演繹」『人文社会論叢 人文科学篇』20、弘前大学、2008年、17-18頁を参照)。

<sup>32</sup> Vgl. Gabriel 2010, 90 f.

実的な思惟以前の存在は絶対的なプリウスであり、「〈存在可能なもの〉を先行者としてのみ排除している *ausschließt*」(SW II-4, 338) が、後続する可能性を排除するものではない。排除しないのみならず、思惟以前の存在は、これとは「別の存在 *ein[...] andere[s] Seyn[...]*」(SW II-4, 349) の「ポテンツが現象することを初めて可能にする」(SW II-4, 338)。現実性との関係なしにそもそも可能性はなく、現象しえない<sup>33</sup>。「別の存在」のポテンツが現象すると同時に、また「〈ポテンツに先行する単なる現実態における必然的な現実存在〉そのものも、〈偶然的な、止揚可能な、非存在可能なもの〉として現象する」(SW II-4, 349) こととなる。あらゆるものに先行的する実的な思惟以前の存在は、別の存在のポテンツの登場においてある種の相対化を蒙り、偶然的なもの、別の存在に取って代わられうるもの、必然的ではあるが、偶然的な必然性として明らかになる。

そこでは神はまずもって「自ら指定したのではない存在」(SW II-4, 351)、「あらゆるものに先行する」(SW II-4, 350) 思惟以前の存在の内にある。この神は、ポテンツの否定を媒介にしてこの現実存在から抜け出し、そこを後にする。つまり別の存在のポテンツを「生み出すことで初めて、神は全き仕方で自己から離れる」(SW II-4, 351)。この自己からの離去、思惟以前の存在からの離去の瞬間において、神は、本質的な仕方です必然的に存在する存在の主 (*Herr des Seyns*) となる。ここで自らの外なる思惟以前の現実的存在を廃棄することも、別の存在の可能性を現実化することもあるいはそれを可能性のままに留めることに関しても自由となる。世界の創造に関して自由となる。これはまったく神の自由意志に委ねられている。ここに世界の偶然的な<sup>34</sup>創造がある<sup>35</sup>。世界の創造にアプリアリな必然性はなく、ただ単に可能であったに過ぎない。

ここで理性とは可能性や本質に関わるものであるので、あらゆる可能性に先行する必然的な思惟以前の現実存在を思惟できない。思惟以前の存在を前にして理性は、「消極哲学においては自らの真の内容を現実的内容として所有しえない」(SW II-4, 345) ことを理解する。ここで理性は「自己の外に置かれ」(SW II-4, 345)、むしろ「すべての思惟以前の存在から出発することを決心する。理性はこの存在に対して身を屈する」(SW II-4, 345) のである。しかし身を屈するのはただ、「ただちにこの存在に向かって再び立ちあがるため」(SW II-4, 345) であるとされる。すなわち、「思惟以前の存在するものは何であるのか *was das unvordenklich Seyende ist*」(SW II-4, 345) という問いを投げかけて立ちあがる<sup>36</sup>ためである。これがシェリングの考える思惟の思惟以前の存在に対する振る舞いである。

---

<sup>33</sup> Vgl. SW II-4, 339.

<sup>34</sup> 九鬼周造は、「西洋の哲学がキリスト教の影響の下に立っている限りは、純粋な偶然論、純粋な驚きの形而上学は出てこないのである。[...] シェリングは自由意志論を主張したに過ぎない」(九鬼周造「驚きの情と偶然性」(1939)『人間と実存』岩波書店、2016(1939)年、178頁)と述べてシェリングに距離を置く。

<sup>35</sup> Vgl. SW II-4, 252 f.

<sup>36</sup> 藤田正勝「積極哲学と消極哲学」(西川富雄監修)『シェリング読本』法政大学出版局、1994年、320-332頁、ここに関しては329-330頁を参照。

ハイデガーの言う、第一の原初に由来する形而上学の「主導的問い：存在者とは何であるか？ was ist das Seiende?」（GA 65, 12）が想起されて然るべきである——これについてはまた論及する。

### 3節 形而上学構想と思惟以前のなもの

本節では、ハイデガーの形而上学構想と思惟以前のなものとの近さを見定めたい。ここでは神ではなく、もっぱら現存在が問題となる。1928年夏学期講義<sup>37</sup>では、現存在の超越、自由についてつぎのように述べられる。

〔現存在自身の〕〈そのために Umwillen〉という自由な対峙 Widerhalt は、〔…〕超越として、事実に *faktisch* そして事実に *tatsächlich* 存在するものを飛び越えるという性格を持つ。超越するものとしての現存在の本質的かつ内的な諸可能性の全体としての世界は、あらゆる現実的存在者を凌駕する *übertrifft*。（GA 26, 248）

現存在の超越は存在者を創造しない。それはむしろまずもって現実存在する存在者を乗り越える。この超越の内に「存在と存在者の区別の遂行」（GA 26, 199）がある。「それが存在を与える *es gibt Sein* のは、ただ現存在が存在を了解する場合だけである」（GA 26, 199）。つまり、〈それが存在を与える *es gibt Sein*〉の「それ *es*」は、〔…〕おのれを時間化する時間性」であり、この「時間性が脱自的統一として時間化するものが、〔…〕世界」（GA 26, 272）である。現存在は時間化に基づく超越によって存在者と存在を区別し、存在の超越論的地平（世界）を根源的な仕方で投企する。これは後期における存在の贈与としてではなく、「実存する現存在が自己自身に存在のようなものを与える（*das existierende Dasein sich selbst so etwas wie Sein gibt*）」（GA 26, 195）こととして考えられている。

〔現存在自身の〕〈そのために Umwillen〉はそのつど、意志の、自由の、すなわち超越する〈自己自身にかかわる存在 *Zu-sich-selbst-sein*〉の〈そのために〉である。これ〔＝超越する〈自己自身にかかわる存在〉〕は〈自己自身へ到来すること *Auf-sich-selbst-zu-kommen*〉の内的可能性を、根源的な期待の時間化の内に、すなわち将来の内に、よりよく言うなら、現存在の再帰性 *Rückläufigkeit* がそれとして構成されるものの中に持つ。（GA 26, 273）

現存在は、自らの〈そのために〉に向けた超越において現実的存在者を乗り越え、そのように

---

<sup>37</sup> Heidegger, Martin: *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz* [Marburger Vorlesung SS 1928]. Hg. von Klaus Held, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1978 (=Gesamtausgabe Bd. 26. II. Abteilung. Vorlesungen 1919-1944).

して自らに付与した存在（世界）から「自体的存在者」（GA 26, 281）の真理（アレーティア）を可能にする。この超越、自由においてこそ、世界、全体としての存在者が脱根拠的に開かれ、〈なぜなにもないのではなく、むしろなにかがあるのか〉、〈なぜあれよりもむしろこれがあるのか〉、〈なぜ別様にではなく、このようであるのか〉<sup>38</sup>という形而上学的問いが問われることとなる。この意味で、現存在の超越、自由は問いと根拠を与える「根拠の根拠 Grund des Grundes」（GA 26, 277）ないし「脱根拠 Abgrund」（GA 26, 234）である。

このハイデガーの思惟にシェリングの思惟以前的存在を結び付けるのは、M.ガブリエルである。彼は、アリストテレスを参照しつつ<sup>39</sup>、シェリングの思惟以前的存在の偶然性を「別様でありうること Anders-Sein-Können」（Gabriel 2010, 88）と規定する。そうして、「存在そのものが偶然的だとすれば、[...] 存在そのものが〈別様にありうること Anders-Sein-Können〉を考えると」（Gabriel 2010, 88）ができるという別の存在（ein anderes Seyn）の可能性を明確に打ち出す。そのうえでガブリエルは、シェリングの「思惟以前的存在は、全き仕方ではハイデガーの意味における」（Gabriel 2010, 96）、すなわち『根拠の本質』（1929）における「根拠の根拠」（GA 9, 174）<sup>40</sup>ないし「脱根拠 Abgrund」（GA 9, 174）<sup>41</sup>であると述べる<sup>42</sup>。ハイデガーでもシェリングでも、思惟が成立するその論理空間そのものには「如何なる根拠も与えることができない」（Gabriel 2010, 96）ことから、ハイデガーの現存在の自由の脱根拠性と、シェリングの思惟以前的存在の無根拠性が重ねられるのである。こうした両者の近さには具体的な影響関係があったと見ることも出来るかもしれないが、ここでは問わない。むしろ、ガブリエルの解釈をさらに批判的に追跡して、彼が明確化した「存在そのものが偶然的だとすれば、[...] 存在そのものが〈別様にありうること Anders-Sein-Können〉を考えると」ができるという思惟以前的存在の偶然性と、後期ハイデガーの存在そのもの自己贈与との重なりを探りたい。

ガブリエルはつぎのように述べる。ハイデガーの後期思想の存在そのもの（Sein selbst）とは「存在と存在者の差異の生起」（Gabriel 2010, 106）であるが、この「差異の生起は、存在を了解するものとしてまずもって存在と存在者を自らの超越によって区別するところの現存在なしには不可能である」（Gabriel 2010, 106）というのである。これは形而上学期のハイデガーの発想そのものである。しかしガブリエルは、この超越の発想から後期ハイデガーの存在史（Seinsgeschichte）の意味を理解する。それによれば、存在史の変遷は現存在の超越による了解と解釈にある。現存在は超越において「存在者の存在をそのつど別様に

---

<sup>38</sup> Vgl. GA 26, 141.

<sup>39</sup> 「「偶然的」であるのは、アリストテレスの尺度付与的な規定によるなら、「別様でありうるもの dasjenige, was anders sein könnte (ὁ ἐνδέχεται ἄλλως εἶναι)」のことである」（Gabriel 2010, 88. Vgl. Aristoteles: “Ethica Nicomachea”, in: *Aristoteles Garaece ex recensione Immanuelis Bekkeri*. Vol. 2, editit Academia Regia Borussica. Berolini: Apud Georgium Reimerum 1831, p. 1139a8).

<sup>40</sup> Vgl. GA 26, 277, 283.

<sup>41</sup> Vgl. GA 26, 234.

<sup>42</sup> Vgl. Gabriel 2010, 96.

了解する *jeweils anders versteht*」(Gabriel 2010, 105) のであり、そうして哲学史上において存在は「そのつど別様に解釈され *jeweils anders ausgelegt*」(Gabriel 2010, 106) てきた。よって存在史とは、「存在概念の連続 *Abfolge der Seinsbegriffe*」(Gabriel 2010, 105) に存する「存在概念の歴史」(Gabriel 2010, 105) となるのである。こうしてガブリエルは、存在のゲシックの変容、別の存在の可能性を現存在の超越に還元する。本発表はこの解釈には距離を置く。むしろここでは、存在の変容が存在そのものの自己贈与にあること、そしてそこでの人間の役割をこの自己贈与及び自己覆蔵の働きを介在する知にあることを見届けたい。そこに後期ハイデガーとシェリングの近さと隔たりも見えてくる。

#### 4 節 思惟以前のなものとしての存在、あるいは自然の生命と介在的な知

後期のハイデガーは、所々で思惟以前のものを自らの言葉として使い<sup>43</sup>、自らの存在概念と同一視している<sup>44</sup>。シェリングとの関係で言えば、彼はつぎのように述べている。(i) 「形而上学は必然的に思惟以前のもののところで終わる」(GA 73.2, 933)、(ii) 「シェリングはこの思惟以前のものをいまだ表象的思惟から理解している」(GA 73.2, 933)。(i) はハイデガーの形而上学批判とシェリングの消極哲学批判の近さを匂わせるが、とりあえずは(ハイデガーの言う)思惟以前のものが形而上学の限界を画すものであることを述べている。(ii) は、シェリングもまた思惟以前のものを形而上学的表象から思惟してしまう、つまり本来の仕方で思索していないと述べる。よって、表象的思惟の意味と思惟以前のものに相応しい別の思索の解明が求められる。後期の対話篇「アンキバシエー〔接近〕」(1944/45)<sup>45</sup>に従うと、表象的思惟とは、超越論的 - 地平的表象による思惟である。

研究者

この前、私たちは思索を超越論的 - 地平的表象作用の形態において描き出しました。

[…]

教師

それ〔=超越論的地平〕は諸対象の見相 *Aussehen* を凌駕する *übertrifft* ものです。

学者

ちょうど超越が諸対象の知覚を追い越す *überholt* ように。

教師

---

<sup>43</sup> Vgl. GA 77, 231.

<sup>44</sup> Vgl. GA 81, 143.

<sup>45</sup> Heidegger, Martin: „Ἀγκυβασίη. Ein Gespräch selbstdritt auf einem Feldweg zwischen einem Forscher, einem Gelehrten und einem Weisen“, in: *Feldweg-Gespräche* [Erdachte Gespräche 1944/45]. Hg. von Ingrid Schüßler. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1995 (=Gesamtausgabe Bd. 77. III. Abteilung. Unveröffentlichte Abhandlungen/Vorträge – Gedachtes), S. 1-160.

それゆえ、私たちは、地平と超越がなにを意味するのかを、凌駕 *Übertreffen* と追越し *Überholen* によって規定するのです。(GA 77, 111)

ハイデガーの見解を代表する「教師」は、「超越論的 - 地平的表象作用」の本質を超越における「凌駕 *Übertreffen*」と「追越し *Überholen*」に見る。これは、うえで見た形而上学期のハイデガーが論じた現存在の地平的超越をも包含する<sup>46</sup>。ハイデガーが表象作用に関して説明するのは、凌駕や追越しといった地平的な超越の働きそのものを問題視するからである。思惟以前のとは、辞書的には〈考えることができないほど古い〉〈人類の記憶が及ばない〉過去の事柄を指すが、これと類比的に、超越が凌駕することも追越しすることもできないものこそ、ハイデガーが同じテキストでシェリングの言葉を借りて「思惟以前のなもの」(GA 77, 146) と呼ぶものである。超越に基づく表象的思惟が思惟できないものである。ハイデガーは、シェリングを思わせる口ぶりで、これを「そこまで私たちが元来思索し入ることができない」(GA 77, 146) もの、「それに先んじてはそもそももうなにも思索されえない」(GA 77, 231) が、そこから「思索の本質が始まる」(GA 77, 146) ものとする。しかしシェリングもまだ表象的思惟に囚われていた。それはすでに見たように、「存在者とは何であるか?」という本質への問いに特徴づけられる理性的思惟を指すと考えて大過ない。ハイデガーにおいてはむしろ「根底的問い: どのように存在は本質化するのか *wie west das Seyn?*」(GA 65, 54) が問題である。この点においてハイデガーとシェリングは別れる。というのもこの問いは、本質存在と事実(現実)存在の区別以前の存在の本質化の働き、つまり、存在の非覆蔵性(アレーティア)を問うものだからである。

ハイデガーの存在の思惟以前性は、この存在そのものの脱去による覆蔵性のうちよりほかにはない。存在そのものは、「存在者がそのなかに現前するところの非覆蔵性」(GA 67, 219) であるが、この「非覆蔵性それ自身はそれとしては覆蔵されたままである」(GA 67, 219)。存在そのものは非覆蔵性だが、非覆蔵的であるのは現前してくる存在者であって当の非覆蔵性そのものは覆蔵的である。それゆえ非覆蔵性は覆蔵性である。「非覆蔵性の「非」は非覆蔵性自身に関して起こらない」(GA 67, 219) のである。この(非)覆蔵性それ自身は、「自らを自己自身の内に覆蔵する」(GA 67, 219)。

存在者を特定のあり方において在らしめる存在そのものの非覆蔵性は、現代で言えば第一の原初に淵源するゲシュテルという存在のゲシックである。これは「人間的には超克され *menschlich überwunden*」(GA 79, 69) うるものではない。もし超越によって形而上学を別の存在、別の原初、別のゲシックへ乗り越えたとすれば、それ自体が形而上学である。なによりも、存在の思惟以前性は、超越によってその背後に回り込んで、それをなにか別のも

---

<sup>46</sup>『哲学への寄与』(1936/38)は、超越に対する態度をつぎのように表明する。「存在者を乗り越える *übersteigen* こと(超越)が問題なのではなく、そうではなく、この区別 [= 存在論的差異] を跳び越えそれでもって超越を跳び越える *überspringen* こと、そして、原初的な仕方存在とその真理から問うことが大切である」(GA 65, 250 f.)。

のに置き換えることが不可能であることを告げているのである。ハイデガーは、形而上学的意味での「超克 Überwinden」(GA 97, 497)を「超越 Transzendenz の絶えざる固定化」(GA 97, 497)と規定して退け、これに対して、原初へ向けた「回想的思索 Das andenkende Denken」(GA 97, 497)を自らのものとして対置する。

ここに、超越には還元されえない、現 - 存在における人間の介在的な知の働きを見出すことができる。それは、存在そのものの自己覆蔵性と自己贈与に介在する人間の知である。その語が由来すると思われるヘルダーリンに即して言うなら<sup>47</sup>、夜の時代にあつてすでに立ち去り、いまだ還らない神々を回想する<sup>48</sup>詩作の言葉となるだろう。「言葉が […] 思惟以前のなものを守る」(GA 74, 112)のである。それは、「言葉が在りしものと来たらんとするものを守る *wahrt*」(GA 74, 112)ことである。在りしものが思惟以前の過去だとすれば、来たらんとするものはいわばそれも思惟以前の将来の別のゲシック、別の原初を意味するだろう。この過去と将来の覆蔵性、最初の始まりと別の原初の移行にこそ、ここでの人間の知、言葉の介在的な役割がある。存在の「ゲシックの変遷 *Wandel*」(GA 79, 69)、「第一の原初の全き変貌」(GA 42, 279)、存在そのものの再帰的な自己変貌のうちにあつてそれを守る (*wahren*) という仕方で介在する知、言葉である。

思うに、この自己変貌の運動は、フュシス、自然の生命の動きである。これはハイデガーやシェリングがしばしばヘラクレイトスを引き合いに出して語る世界造化の火炎現象と親近的である。つまり消えゆくものと新たに立ち上がるものとの同時的な対立と統一からなるフュシス、自然、生命の自己反復である。シェリングは、印象深い仕方で生命の対立と統一の運動について語っていた——「対立が永遠に生じつづけるのは、統一によってたえずくりかえし灼かれんがためである。そして対立が永遠に統一によって灼かれるのは、たえずそれを新たに生き抜かんがためである」(SW I-8, 230)。そこには同一性と同一性を壊す新たなものとの対立と統一の生命的な過程がある<sup>49</sup>。それは、同じものの二度三度の繰り返しではなく、そのつど「唯一的かつ一回的な *einzig und einmalig*」(GA 65, 385)フュシス、自然の生命的な出来事であるだろう。ハイデガーは、フュシスや存在の真理を「竈の火」(GA 65, 228)とも表現していたが<sup>50</sup>、シェリングにとって竈とは、「たえずおのれ自身を灼滅するとともにその灰からふたたび新たに甦る生命の竈 (*der Heerd des beständig sich selbst verbrennenden und aus der Asche wieder neu verjüngenden Lebens*)」(SW I-8, 230)であった。ここからまた『自由論』の神が悟性の体系に還元されえない生命とされていたこと

47 「思惟以前のなものへと流離う (ヘルダーリン)」(GA 74, 100)。

48 Vgl. Hölderlin, Friedrich: *Brod und Wein. An Heinze* [1801], in: *Gedichte nach 1800* (Text). Hg. von Friedrich Beissner. Stuttgart: Kohlhammer 1951 (=Große Stuttgarter Ausgabe, Hölderlin Sämtliche Werke Bd. 2-1), v. 31-36 und v. 115-122, S. 91-94.

49 生命現象の一回性、反復性の問題については、檜垣立哉「単独的なものの様相——偶然性・一回性・反復性」『哲學』No. 63、2012年、115-130頁が示唆的である。

50 拙論「〈根源の場所〉と〈かまど〉——M.ハイデガーのヘルダーリン解釈をめぐって」『立命館哲学』第27集、立命館大学哲学会編2016年3月、95-125頁を参照。

も象徴的に想起される。そこで人間とは、自らがそのうちに生きるこの秘匿されたフュシスの、自然の生命の何故なし (ohne Warum) に燃えあがりつづける炎の傍らに座してそれを守る者である。

## 結び

さて、本発表では、ハイデガーの『自由論』解釈から、後期シェリングの思惟以前的存在へ視点を移動させつつ、このふたりの哲学者の比較考察のなかに現 - 存在の問題としての人間の介在的な知の在り様を解き明かすことを試みてきた。そのためにまず第1節では、『自由論』解釈を見ることにした。そこでは、ハイデガーの関心を摘出し、新プラトン主義に淵源するスピノザの知的愛に範例的に象徴される、神ないし全体としての存在者における人間の介在的な知のあり方が見出されることとなった。これは、ハイデガーの形而上学期における人間存在の超越に基づく地平的表象を基本とする人間中心主義、すなわち人間から発し、自然を乗り越えて人間自身へ還るという思想には見いだされないものである。ハイデガーは、シェリングの主に『自由論』との対話からそれについての閃きを受け取り、継承発展させた、一定程度そう考えることができると思う。従来こうした知のあり方について特に解明がなされてきたとは言えない。だが、こうした介在的な知のあり方が、その後のハイデガーの後期思想の形成において決定的に重要な役割を果たしたというのが本発表の見立てであった。この見立てのもとで、第2節以降は、さらに後期ハイデガーとシェリングのあいだの近さと隔たりを思惟以前的存在の視座から明らかにしつつ、存在そのもの、フュシスの生命における自己変貌という存在中心主義的な出来事過程における人間の介在的な知のあり方を回想 (Andenken) に明らかにしようと試みるものであった。

## 略号一覧（順不同）

【ハイデガーの文献略号】 **GA 9:** „Vom Wesen des Grundes“ [1929], S. 123-175. **GA 17:** *Einführung in die phänomenologische Forschung* [WS 1923/24]. **GA 26:** *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz* [SS 1928]. **GA 42:** *Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit (1809)*. [SS 1936]. **GA 53:** *Hölderlins Hymne »Der Ister«* [Freiburger Vorlesung im SS 1942]. **GA 60:** *Augustinus und der Neuplatonismus* [SS 1921], S. 160-299. **GA 65:** *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*. **GA 67:** „Das Wesen des Nihilismus“, S. 175-256. **GA 73.2:** *Zum Ereignis-Denken*. **GA 74:** *Zum Wesen der Sprache und zur Frage nach der Kunst*. **GA 77:** „Ἀρχιβασις. Ein Gespräch selbstdritt auf einem Feldweg zwischen einem Forscher, einem Gelehrten und einem Weisen“ [Erdachte Gespräche 1944/45], S. 1-160. **GA 77:** „Abendgespräch in einem Kriegsgefangenenlager in Rußland zwischen einem Jüngeren und einem Älteren“, S. 203-245. **GA 79:** „Die Kehre“ [Bremer Vortrag 1949], S. 68-77. **GA 81:** „Winke – Inwiefern das Denken dichtender ist als das Singen (Entwurf)“, S. 143. **GA 97:** *Anmerkungen I-V (Schwarze Hefte 1942-48)*. **Briefwechsel:** Heidegger, Martin/Jaspers, Karl: *Briefwechsel 1920-1963*. Frankfurt am Main 1990. 【シェリングの文献略号】 **SW I-7:** „Aphorismen über die Naturphilosophie“ [1806], S. 198-244. **SW I-7:** *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände* [1809], S. 331-416. **SW I-8:** „Die Weltalter. Bruchstück. (Aus dem handschriftlichen Nachlaß.)“ [1813], S. 195-344. **SW I-10:** „Darstellung des philosophischen Empirismus. (Aus dem handschriftlichen Nachlaß.)“ [1830], S. 225-286. **SW II-3:** *Einleitung in die Philosophie der Offenbarung oder Begründung der positiven Philosophie*. [1842/43], S. 1-174. **SW II-4:** *Philosophie der Offenbarung. Zweiter Theil*, S. 1-334. **SW II-4:** „Andere Deduktion der Principien der positiven Philosophie“ [1939-?], S. 335-356. **GPP:** *Grundlegung der positiven Philosophie. Münchner Vorlesung WS 1832/33 und SS 1833*. Torino: Bottega d'erasmo 1972. 【その他二次文献略号】 **EdB:** „Editorischer Bericht“, in: *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Hg. von Lore Hühn u. Jörg Jantzen. Stuttgart: fromman-holzboog 2010, S. 267-317. **GGW:** H.-G. Gadamer *Gesammelte Werke*. Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) 1960 ff. **Gabriel 2010:** Gabriel, Markus: „Unvordenkliches Sein und Ereignis. Der Seinsbegriff beim späten Schelling und beim späten Heidegger“, in: *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Stuttgart: fromman-holzboog 2010, S. 81-112. **Benveniste 1966:** Benveniste, Émile: *Problèmes de linguistique générale, I*. Paris: Éditions Gallimard 2012 (1966). **Gebhardt 1921:** Gebhardt, Carl: „Spinoza und der Platonismus“, in: *Chronicon Spinozanum*. Tom I. Hagae Comititis (=Den Haag): Curis Societatis Spinozanae 1921. 『短論文』: スピノザ (畠中尚志訳) 『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』岩波書店、2005 (1955) 年。